企業史料協議会『ニューズレター』No.148, 2013年12月。

「社史概論」「事例研究：社史編纂」

高井哲彦

　「社史概論」では、一橋大学教授の橘川武郎講師が、図書館での貸出頻度を例に、社史が「企業の顔」として長期に渡り部分活用されると強調されました。社史は、外への広報や、内への教育、未来への学習のために、真実や、ストーリー、使いやすさが必要で、デジタル化や、企業アーカイブ、社内研修と連携すれば企業の武器にもなると、事例豊富に論じられました。

　企画時から社内研修を前提に教育部門が加わり、執筆時はプロセスを論じたストーリーを描き、完成時は検索機能をつけ、完成後はビジネスアーカイブを構築することが、強調点だと思います。とくに電力・石油系を含む24社の社史経験を元に、いかなる状況で誰がどのように決断したのか、改革の筋道を示すために社史が大切だ、と提起されました。バブル以降の「失われた10-20年」論争を見ても、変革期や混迷期にこそ過去から学ぶ意味があると思いました。

　「事例研究：社史編纂」では、企業史料協議会理事の上田和夫講師が、自ら指揮した「花王ミュージアム」設立と『花王120年史』編纂の背景を解説されました。同社は1940年刊の『50年史』を端緒に、社史を6冊刊行しました。花王ミュージアムは、2004年の経営会議で小博物館の刷新を決め、創業家史料を含む企業史と清浄文化の社会史を結合し、2006年に完成しました。2012年刊の『120年史』は、映像版をメイン、書籍版や年表・資料集をサブと2008年に企画し、大学教員とコンペによる執筆・編集体制を2009年に立ち上げ、映像版と最終原稿を2011年に完成しました。

　社史編纂を経営に位置づける戦略性、大胆な人材・予算投下と周到な工程管理、そして経営判断とチームワークのスピード感は、圧巻でした。加えて、経営トップに執筆者・編集者と一緒に対面し、同一資料を3時間解説してもらい、動画撮影の上で書き起こしたオーラルヒストリーや、最新画像技術や再現ドラマを駆使した映像版は、新機軸だと括目しました。また、書籍版とDVD・HP版は、長短所が異なるため、両立の価値があると感じました。

　私自身は、外国経営史の教育・研究を行う立場で日本の社史を参照しています。アフリカ人経営史家らと連携して仏領植民地経済史料を収集・撮影・整理・保管する立場では、日本のビジネスアーカイブからも学んでいます。日本の企業文化の一貫性と長寿性は、企業・研究者・編集者の戦略的連携と、アーカイブと社史の相互作用こそが源泉だと信じる次第です。

(北海道大学)